

第3回腎不全外科研究会は1994年6月18日に名古屋において大島伸一会長(社会保険中京病院泌尿器科)の下で開催された。

総説①として腎疾患と眼合併症が取り上げられ、透析患者・腎移植患者、糖尿病患者における眼合併症の病態、治療法、手術治療および成績について詳細に解説されている。総説②では内シャント閉塞の原因として、シャント作製時は血管攣縮が、作製後1年未満は低血圧や局所の浮腫・血腫などが、作製後3年未満は内膜肥厚などが、作製後3年以降は内膜肥厚に加え血管の蛇行や穿刺による瘢痕形成などが指摘され、それぞれの時期におけるシャント修復時の注意点などが解説されている。

特集は多発性嚢胞腎(常染色体優性遺伝)であり、その病態解明の歴史や遺伝形式、ウイルスベクターを用いた遺伝子治療の可能性、透析前期・透析期の患者管理法が述べられ、さらに嚢胞硬化療法・腎摘出手術時の注意点等が詳解されている。

座談会記録は座長の大島先生を中心に内科・外科それぞれの立場から腎移植を含めた腎不全医療の特徴や現況と問題点について討論が行われた。透析導入後30年生存を目指す時代となり、腎不全の原疾患や合併症の病態の多様化と集学的治療の必要性が指摘された。サイクロスポリンにより移植腎10年生着率が60～70%となる中で、内科医のサポート体制や外科医の技術水準向上を図るシステムを構築すること、多くの専門分野の医師や看護師が十分なコミュニケーションをとり情報を共有しチームとして機能すること、患者QOLに留意した治療であるべきことなどが強調された。

一般演題は臨床経験10題、症例報告10題、看護2題が収録されている。